

日経

ヘルスケア

NIKKEI
HEALTHCARE

12

2009
NUMBER 242

2010

特集1

徹底予測

診療報酬改定は こうなる!



特集2

介護報酬改定で追い風
民間参入「完全解禁」を目前に
急拡大する訪問リハビリ

で、1人は担当者会議に出席したり、医師との調整に当たるため、訪問に出るのは主に2人。これらのスタッフは、基本的に訪問リハビリのみに携わる。ただし、退院を間近に控えた入院患者に対しては、訪問リハビリのスタッフが院内でのリハビリも行う。

訪問件数はスタッフ1人当たり1日に平均で3～4件。1件当たりの訪問時間は平均40分で、大半の利用者に2回分の報酬(610単位)を算定している。

利用者数や訪問件数は決して多くはないが、既に9月時点で単月黒字化を達成した。月によって変動はあるものの、収入は90万円前後で、支出は人件費が中心で80万円程度。約10万円の黒字を生み出している。現在のペースが続けば、年度末の時点で累損を解消できそうな勢いだ。

訪問件数が少ない割に収入が多いのは、短期集中リハビリ実施加算(退院1カ月以内は1日340単位、3カ月以内は1日200単位)を算定できているため。「病棟と連携し、退院直後から訪問に入るケースが多いので、利用者の半数弱に加算を算定している」(リハビリテーション科係長の田中重成氏)。

このほかにも、勤続年数が3年以上のリハビリ職がいれば算定できる「サービス提供体制強化加算」(1回6単位)を利用者全員に算定している。同院の訪問リハビリは、病棟との相乗効果をうまく生み出しているといえるだろう。

ただし、院長の佐々木氏は、「訪問リハビリで利益を出そうとは思っていない」と言い切る。「利益を追求するなら、訪問リハビリに人員を割かずに、回復期リハビリ病棟だけで回した方が圧倒的に

効率がいい。訪問リハビリをやるのは、あくまで退院患者へのサービスという位置づけ。年度末時点で赤字にならないければ御の字」との考えだ。

スタッフの確保が悩みの種

同院は今後、訪問リハビリの利用者数がさらに増えるとみている。退院しても引き続きリハビリを受けたいという患者のニーズが強いからだ。「訪問リハビリを希望する利用者は、50～60歳代が中心で、中には40歳代もいる。比較的若い世代が多いため、80歳代が中心で、預かりの要素が強い通所リハビリにはなじまず、訪問リハビリに落ち着くようだ」(田中氏)。

同院の悩みは、訪問リハビリに十分

な人員を割り当てられないこと。67人もスタッフを抱えているが、「それでも足りない。あと10人は欲しい。そうすれば、訪問リハビリに1人か2人回せる」(佐々木氏)という。

池友会は傘下に4カ所のリハビリスタッフ養成校を抱え、うち三つは香椎丘リハビリテーション病院に近いエリアにある。だが、毎年3～5人のスタッフが退職するため、必要な数のリハビリ職を確保するのに苦勞する状態が続いているという。

とはいえ、訪問リハビリのニーズが日に日に高まっていることから、「できる限りニーズに対応する形で、訪問リハビリのスタッフを拡充していきたい」と佐々木氏は話している。

ゆきよしクリニック (新潟市江南区)

地域住民のリハビリニーズに応え 年間2万件弱を手がける異色の診療所

「地域には、じわじわとADL(日常生活動作)が低下し、気づいた時には動けなくなっていたという高齢者が少なくない。こうした患者をすくい上げるのが、我々診療所が手がける訪問リハビリの役割だ」

こう語るのは、新潟市を中心に新発田市、阿賀野市、五泉市などで訪問リハビリを提供する、医療法人らぼーる新潟・ゆきよしクリニック院長の荻^{おぎし} 莊^{しょう} 則^{のり} 幸^{ゆき} 氏だ。

同院は1997年6月、整形外科とリハビリテーション科を標榜する無床診療所として開業。その後の2000年4月、介護保険の施行と時を同じくして訪問

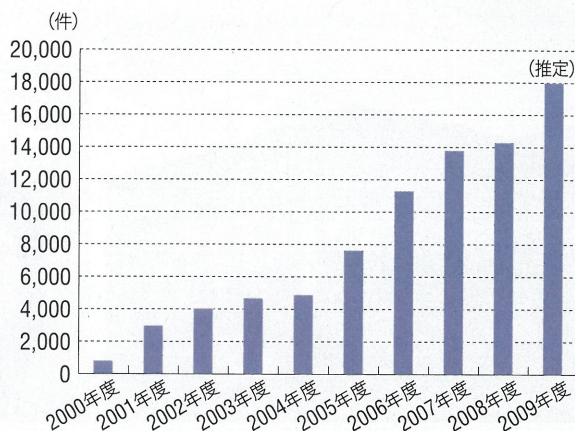
リハビリを始めた。

きっかけとなったのは、開業前に担当した県の身体障害者更正相談所での経験だ。「在宅の重度障害者を訪問診療事業で回ったが、雪深い山間部などの医療・福祉の基盤は脆弱(ぜいじゃく)で、足がこたつに入ったままの形で固まったような高齢者を数多く見てきた。それで訪問診療や訪問リハビリの必要性を強く感じるようになった」(荻莊氏)。

直行直帰で1日6、7件を訪問

整形外科系の診療所が訪問リハビリを手がけるケースは、決して珍しくはな

図2 ●ゆきよしクリニックの訪問リハビリ実施件数の推移



「在宅でADLが低下していく高齢者は多い。それを訪問リハビリですくい上げるのが診療所の仕事」と話す院長の荻莊則幸氏(写真右)。左は作業療法士の大越満氏



医療法人らぼーる新潟 ゆきよしクリニック

- 所在地…新潟市江南区
- 診療科目…整形外科、リハビリテーション科
- 開業時期…1997年6月(訪問リハビリは2000年4月開始)

い。ただ、同院は規模の面で一線を画す。抱えるリハビリスタッフは22人で、2008年度の訪問リハビリ件数は1万4294件に達する。これだけの件数をこなす医療機関は、病院を含めてもそう多くはない(図2)。

「退院直後の患者に対しては、病院から訪問リハビリを提供しやすいが、徐々にひざや腰が固まっていくような高齢者の存在は見落とされがち。こうした人の相談をケアマネジャーから受けていて、気がついたら今の規模になっていた」と荻莊氏は話す。

実際、同院の整形外科の外来患者が訪問リハビリを利用するケースは少なく、利用者の9割は地域のケアマネジャーからの依頼を受けて実施している。

同院は山間部を含め、広範囲に訪問リハビリを提供している。その面積は約600km²を超え、東京23区に匹敵する広さだ。その一方で、スタッフ1人が1日に訪問する件数は6、7件と、地方としては多い部類に入る。

多くの訪問件数を支えるのが、独自の勤務体系だ。スタッフは利用者宅への直行直帰が原則。診療所に顔を出すのは週1回、院長や院内スタッフとの打ち合わせの時だけで、これにより訪問の

効率を上げている。訪問記録や報告書は、自宅のパソコンで作成してもらい、実績管理を行っている。

改定の増収分はスタッフに還元

荻莊氏は「特に宣伝はしていない」と言うが、地域の口コミなどで利用依頼は引きも切らない。「ケアマネジャーから月に10人弱の新規利用者の紹介がある」と、同院のOTで訪問リハビリ事業所を取り仕切る大越満氏は話す。2009年度の利用者数は前年を大きく上回る勢いで、前年度25%増の1万8000件近

くに達しそうだという。

訪問リハビリに精力的な同院ではあるが、「改定前の事業収支はトントンか、やや赤字の状態だった」(荻莊氏)という。だが、改定後は基本報酬のアップとサービス提供体制強化加算の算定などで収入が2割増え、「ようやく一息ついた」格好だ。

荻莊氏は「地域のニーズに応えるために始めた事業なので、訪問リハビリでもうけるつもりはさらさらない。利益はぎりぎりまでスタッフの給与に還元している」と話している。

(株)セラピット (神戸市西区)

リハビリ中心の訪問看護ステーション 18人のスタッフで月1600人を回る

(株)セラピットは、神戸市内で訪問看護ステーションと通所介護事業所を展開する民間の介護事業者だ。「訪問看護ステーション リハ・リハ」を中核に、リハビリを軸とした介護サービスを提供している。

設立は2003年。OTでケアマネジャーの資格も有する代表取締役の大浦由紀氏が立ち上げた。以前、老健施設にケ

アマネジャーとして勤務していた時、「地域に訪問リハビリを提供する事業者が皆無で、在宅での継続的なリハビリ体制が不十分だと痛感した」ことが起業のきっかけだ。

訪問看護7に携わるリハビリスタッフは18人(常勤換算で12~13人)。このほかに看護師を6人(常勤換算で4~5人)抱え、月延べ1600~1700件の訪問